

徳富蘆花の小品「雑木林」に登場する樹木について(2)

金子孝吉

Takayoshi Kaneko

滋賀大学 経済学部 / 教授

- I はじめに
- II 蘆花が愛した「東京の西郊」の「丘」にある雑木林
- III 雑木林の中の「檜」と「櫟」
- IV 雑木林の中の「榛」
〔以上：(1)、『彦根論叢』407号掲載〕

「東京の西郊」の「丘」にある雑木林に見られる樹木として、蘆花が次に挙げているのが「栗」である。

「栗」の木も、「檜」、「櫟」と並んで武蔵野の雑木林の中にはよく生育している樹木だった。

現在、クリの木といえば、まずはその美味しい実を人が食するための樹木だと言えるだろう。だが、クリの木は、実が食用になるだけでなく、薪炭用にも、また材木用にも盛んに利用されてきた。とりわけ材木としては、木質が堅硬で、抜きんでた耐朽力を有し、水湿に非常によく耐えるという性質ゆえに、「湿気の多い場所」で、すなわち「家屋土台、浴室の板、土木用杭、船材、舵、水道木管、橋梁など」¹⁾に用いられてきた。明治期になってからは、日本各地で鉄道が急速に敷設されていくのに伴って、クリの木は枕木として多用されるようになり、大量に伐採され、クリの木の生育本数が著しく減少した²⁾ことはよく知られている。

クリは、その実が昔から人間にとって大切な食糧源となり、また、耐湿性に優れた丈夫な土木材・建築用材として人間の役に立つ有用材だったにもかかわらず、ナラやクスギと同じ仲間のブナ科の落葉広葉樹であること（姿かたちもよく似ている）、ナラ・クスギと同様に薪炭用としても利用されてきた——ただしクリの薪炭としての評価はナラ・クスギよりは低い——ことなどにより、クリにとっては気の毒であるといえるが、常緑針葉樹であるヒノキ科の木々やマキ、スギ、マツのような高級建築材と同列に扱われることはなかった。また、サクラあるいは紅葉したカエデ類のような特別な美的鑑賞の

1) 柴田桂太編『資源植物事典』(7版、増補改訂版)北隆館、1989年、185頁。

2) 今井敬潤『栗 ものと人間の文化史 166』法政大学出版局、2014年、59頁以下を参照。

3) 「雑木」とは、Ⅲでも述べたように「良材とならない種々雑多の樹木。薪材などにする木」(『広辞苑第六版』岩波書店、1617頁)を指すとされているが、こうした「雑木」という呼称に

対象となる木でもなく、ウメのような香しい匂いを放つこともないということもあって、クリは通常は「雑木」³⁾のうちに数え入れられることになるのである。

さて、蘆花はこの小品において、「雑木林」を構成する主要樹木として、「檜」、「櫟」、「榛」に続いて、なぜ「栗」の木を挙げたのだろうか。

もちろん、当時、武蔵野の雑木林中に、実際にクリの木がたくさん生えていたことが、その第一の理由であるのは間違いない。しかし、蘆花がこの小品中に「栗」の木を登場させているのは、ただそれだけの理由ではないと考えられる。

クリの木について蘆花は、小品「雑木林」が収められている『自然と人生』「自然に對する五分時」中の「栗」という別の小品において、次のように描写している。

栗は野人なり。木膚も葉もがさがさとして如何にも木訥に、如何に巧言令色を嫌へばとて、毬の逆茂木、厚革の鎧、猶其上に洗染の鎧下までつけて、奥深く甘き心を秘するは余りならずや。然も余は栗を愛するなり⁴⁾。

蘆花は、まず、「栗」は「野人」、すなわち粗野で無粋で、洗練されたところがない木である、と書く。確かに、クリの成木の「木膚」(=樹皮)は、ごつごつしており、縦に深い割れ目が入っていて、色も灰黒く、総じて武骨そのものといえる。葉も、ごわごわしていて、鋸歯の先端が尖っているし、その実に至っては、長針状の棘が全面に密生している「毬」に包まれ、棘が人を刺した場合には飛び上がらせるほど痛い思いをさせる。毬がはじけても、鬼皮と呼ばれる硬い果皮がなおも果肉を守り、その内側

にはさらに、剥き取るのにすこぶる苦勞させる渋皮が果肉をくるんでいる。クリは、その樹皮も「葉」もまさしく「がさがさとして」いて垢抜けず、実の果肉を覆う毬・鬼皮・渋皮は、人が触れたり近づいたりするのを拒絶しているのである。蘆花はクリを形容する際、「逆茂木」、「厚革の鎧」、「洗染の鎧下」という、古の武人が戦に行くときの出で立ちの比喩を用いているが、「野人」という呼び方と合わせると、クリの風采は、灰黒色の深い皺が刻まれた顔立ちの、粗野で荒々しい、人を寄せ付けない野武士のそれを連想させるといえよう。こと外貌に関しては、クリは野暮で、がさつで、人当たりがまったくよくない「野人」のごとき木なのである。

しかし、それを別の角度から見ると、クリは「木訥」で実直なのであり、自分を変に飾り立てることのない木、「巧言令色を嫌」い、他人にいやらしく媚びることがない質実な木、ということになる。しかも、クリは、棘だらけの毬、鬼皮と渋皮に包まれたその最も「奥深く」に、「甘き心」=最高に甘美な果肉を「秘」しているのである。蘆花は、そのような武骨な外観をもちながら美味な実をならせる「栗」の木を「愛する」と明言する。

この小品「栗」では、そのあとに続く文章で、蘆花は、自分が暮らしていた「邸内」に生えていたクリの木に言及する。

余が二年あまり寓せる邸内には栗の木多かりし。初夏の頃にもなれば、青々と茂れる梢に形さへ色さへ海軍將士の肩総其まゝの花ふさふさと咲きて青空に映りたる、流石に棄てられぬ趣あり。星だらけなる夏の夜の空を、深黒き其梢のさはさはと摩で、戦ぐは涼しきものなり⁵⁾。

抵抗を感じる者は少なくない。軽侮感が付きまとう「雑木」という分類は、あくまでも林業関係者らの立場からおこなわれているものにすぎず、ナラ、クヌギ、ハンノキ、クリなどの「雑木」とされている落葉広葉樹であっても、別の観点から見れば、様々な用途に利用可能で、人間生活に役立つ木なのである。犬井正は、「雑木林に冠された『雑』の字は雑巾、雑用、雑役、雑種などと同様に、農民が平地林に対して抱いている『重要・

不可欠』という感覚とは程遠い感じを与える」として、この引用文中にもあるように、雑木林を「平地林」と呼ぶことを提唱している(犬井正『人と緑の文化誌』三芳町教育委員会、1993年、36頁)。

4) 徳富蘆花『自然と人生』岩波文庫、1958年(改版)、71頁。

5) 同上。

「邸」とは、東京赤坂氷川町にあった勝海舟邸を指す。蘆花は、勝邸の敷地内にあった借家に、妻愛子や自分の両親とともに、明治27年の5月から明治30年の1月3日まで暮らしていた。

蘆花は、ここでクリの花の描写をおこなっている。クリは「初夏の頃」、その枝先に、淡い黄白色の小さな花の集まりをつける。しかし、それは一般的には地味な花とされ、通常、世間から注目を浴びることは、まずない。ウメやサクラの花は知っていても、クリの花を知っている人は、確かに少ない。そもそもクリの木に花が咲くのを見たことがないという人も多い。それは、今だけではなく、昔もそうだった。だからこそ、芭蕉は『おくのほそ道』で、「世の人の見付けぬ花や軒の栗」⁶⁾という句を詠んだのである。芭蕉の時代でも、クリの花はかえりみられることが少なかった。クリの花は、「めだゝぬ花」⁷⁾の代名詞でもあるのである。

クリの花は、同じ一本の木に雄花と雌花をつけるが、雄花のほうが量が多く、雌花は雄花の基部にごく小さく、1、2個つくだけである。クリーム色をした小さな雄花はたくさん集まって「ふさふさ」した尾状花序をつくり、それが穂のように長く伸びる（あるいは垂れる）。

多数の雄花が集まって「ふさふさ」としている花穂を、蘆花は「エポオレット」（総付きの肩章）という西欧由来のモダンな比喻を用いて表現した。これは、読む者にたいそう新鮮な印象を与えるというてよいだろう。

蘆花が小品「雑木林」を執筆したのは明治29年秋頃である⁸⁾が、それとほぼ同時期に、クリの花を、

まったく異なる形容を用いて表現した作家がいる。正岡子規である。

子規は明治26年に「毛虫にもならで落ちけり栗の花」⁹⁾、明治29年に「毛虫にはせじと掃きけり栗の花」¹⁰⁾と詠み、クリの花がパイプの中を洗浄するときに用いるチューブ・ブラシのような形状をしていることから、「毛虫」に喩えている。「毛虫」とは、ずいぶんと気の毒な言い様である。子規は明治29年に「栗の花山猫和尚となん呼べる」¹¹⁾という句も作っていて、栗の花を、ふさふさした毛が生えている山猫——山寺に棲む、怪しげで一癖ありそうな山猫和尚——の尻尾に喩えている。「毛虫」呼ばわりされるよりはましたが、クリの花をおかしまのあるものとして捉えてはいても、美しいものとして表現していないのは明らかだといえよう。

それに比べて、蘆花によるクリの花の「初夏の頃にもなれば、青々と茂れる梢に形さへ色さへ海軍将士の肩総其まゝの花ふさふさと咲きて青空に映りたる、流石に棄てられぬ趣あり」という描写からは、蘆花がクリの花を威風ある立派なもの、好ましいものとして見ていることが分かる。

世間からはほとんど認知されていないクリの花ではあるが、実際、意識して、よく見てみれば、その黄白色の長い「ふさふさ」した花穂が樹冠のあちこちから上に伸び、あるいは垂れ下がる姿は、まさしく夜空に広がる「柳花火」のようでもあり、「目を見張」らせる咲き振りである¹²⁾といえる。薄い黄白の花の色は決して派手ではない。だが、枝から穂状に長く伸びる花の量がなにしる豊富で、樹木を覆わんばかりに咲くので、壮観さを感じさせるのは確かである。

6) 芭蕉『新版 おくのほそ道』 頼原退蔵・尾形仿訳注、角川文庫、2003年、23頁。

7) 同上、174頁。「世の人の見付けぬ花や軒の栗」の初案とされる句に、「かくれがやめだゝぬ花を軒の栗」（『伊達衣』等）、「隠家やめにたゝぬ花を軒の栗」（『曾良書留』『雪丸げ』）がある。頼原退蔵・尾形仿による「発句評釈」を参照（同上、174-176頁）。

8) 小品「雑木林」の成立時期については、拙稿、研究ノート「徳富蘆花の小品「雑木林」の成立経緯について」、『彦根論叢』第402号、2014年を参照。

9) 『子規全集』第1巻「俳句1」講談社、1975年、314頁。

10) 同、第2巻「俳句2」講談社、1975年、501頁。クリの雄花は受精後に脱離して、木の下に地面には、落下したブラシ状の——毛虫に似ていなくもない——花が散乱する。

11) 同上、502頁。

小品「栗」とほぼ同じ頃に執筆された蘆花の代表作『不如帰』でも、彼の栗に対する深い愛着を窺うことができる。

『不如帰』『五の一』で、蘆花は、ヒロイン浪子の父である片岡中将将を登場させているが、その際に、中将の書斎部屋や、部屋の横の庭にあって満開となっている栗の花を描写している。

赤坂氷川町なる片岡中将の邸内に栗の花咲く六月半ばのある土曜の午後、主人子爵片岡中将はネルの単衣に鼠縮緬の兵児帯して、どっかりと書斎の椅子に倚りぬ。…中略…

草色のカーテンを絞って、東南二方の窓は六つとも朗らかに明け放ちたり。…中略… 南は栗の花咲きこぼれたる庭なり。その絶え間より氷川社の銀杏の梢青鋒をたてしように見ゆ。

窓より見晴らす初夏の空おおおおと浅黄繻子などのように光りつ。見る目清々しき緑葉のそこここに、卵白色の栗の花ふさふさと満樹に咲きて、画けるごとく空の碧に映りたり。窓近くさし出でたる一枝は、枝の武骨なるに似ず、日光のさすまに緑玉、碧玉、琥珀さまざまの色に透きつ幽めるその葉の間々に、肩総そのままの花ゆらゆらと枝もたわわに咲けるが、吹くとはなくて大気ふるうごとに香は忍びやかに書斎に音ずれ、薄紫の影は窓の闕より主人が左手に持てる「西比利亞鉄道の現況」のページの上にちらちらおどりぬ¹³⁾。

ここでは、「初夏の空」が「おおおお」と光っている爽やかな「土曜の午後」を、明るく落ち着いた「書斎」の中で、片岡中将が悠々と穏やかに過ごしている様子が美しく描かれている。

蘆花は、南の「庭」に「咲きこぼれる」クリの花について、「見る目清々しき緑葉のそこここに、卵白色の栗の花ふさふさと満樹に咲きて、画けるごとく空の碧に映りたり」と、また「肩総そのままの花ゆらゆらと枝もたわわに咲ける」とも描写している。これらの書き振りからは、蘆花がクリの花を、「清々しい」「初夏」を迎えたときの幸福感を象徴するような花、豊かな生命力にあふれた花として捉えていることが分かる。小品「栗」と同じく、ここでも、クリの「ふさふさ」とした花が「肩総そのまま」であると形容されているが、片岡が中将の位にある軍人であることから、彼の邸内の庭で「咲きこぼれる」クリの花を喩えるにはまさにぴったりの表現になっているといえよう。

また、クリの「葉」も、小品「栗」では「がさがさ」と形容されていたが、ここでは「見る目清々しき緑葉」、「枝の武骨なるに似ず、日光のさすまに緑玉、碧玉、琥珀さまざまの色に透きつ幽める」葉というように、初夏の光を浴びて葉がその色調を微妙に変えていくさまが美しいものとして描かれている。

さらに、クリの花の「香り」について、蘆花は「吹くとはなくて大気ふるうごとに香は忍びやかに書斎に音ずれ」と述べていて、この書き方からは、花の香りについてもやはり好意的に評価していると判断される。

ただ、クリの花の香りについては、一般的には様々な捉え方があることは言うておく必要があるだろう。梅雨時に咲くクリの花の香りはけっこう強く、それを「独特の甘い匂い」¹⁴⁾とを感じる者がいる一方で、その香りを「青臭い」「生臭い」と感じ、好ましく思っていない者も多い¹⁵⁾。三木謙吾に至って

12) 有岡利幸『資料 日本植物文化誌』八坂書房、2005年、272頁を参照。有岡は、クリの花について、「大きな樹冠いっぱい、柳花火とも警えられる長い花穂がたれ、目を見張る」と書いている。

13) 徳富蘆花『不如帰』岩波文庫、1971年〔改版〕、36-38頁。

14) 木村陽二郎監修『図説 樹と花の事典』柏書房、2005年、158頁。柴田桂太編、前掲『資源植物事典』では、「虫媒花で焦げるような甘い香を放つ」(183頁)とされている。

15) クリの花の臭いについては、「青臭いというか、物憂い匂い」、「梅雨の晴れ間のむせ返るような暑さのなかで、この花の匂いに出会うとけだるさが強まる」(倉本宣・内城道興編著『雑木林をつくる』百水社、1997年、140頁)というような否定的な評価を下す者は多い。「甘くやや精臭を帯びた生臭い匂い」(伊東隆夫他『日本有用樹木誌』海青社、2011年、89頁)などと説明されることもある。

は、クリの花について、「花としては美しさを持つてゐないのみならず一種不愉快な臭気を持つてゐる、…中略…くりなどは最も強烈でその下に立つて居るに堪えない位である」¹⁶⁾とさえ述べているほどである。

どちらかといえば好ましく思われなことの多いクリの花の香りではあるが、先ほどの蘆花による花の香りについての叙述からは、その独特な匂いを敬遠することなく、それも含めてクリの花のすべてを蘆花は好ましく捉えていることが分かる。

さて、『不如帰』『五の一』の中で、蘆花は、片岡中將の書齋とクリの木だけでなく、中將の容貌と人柄についても描き出していた。

両の肩怒りて頸を没し、二重の顚直ちに胸につづき、安祿山風の腹便々として、牛にも似たる太腿は行くに相擦れつべし。顔色は思い切つて赭黒く、鼻太く、唇厚く、鬚薄く、眉も薄し。ただこのからだに似げなき両眼細うして光り和らかに、さながら象の目に似たると、今にも笑まんずる気はいの断えず口もとにさまよえるとは、いうべからざる愛嬌と滑稽の嗜味をば著しく描き出しぬ¹⁷⁾。

また、蘆花は、この後で、片岡中將が「大山巖々として物に動ぜぬ大器量の將軍」であり、「その二十二貫小山のごとき体格と常に怡然たる神色とは洵々たる三軍の心をも安からしむ」¹⁸⁾とも書いている。

巨漢であり、年齢を重ねた片岡中將の外観は、体つきも顔立も、一見するとまったく冴えたところがない。しかし、よく観察してみれば、その「細い「両眼」の中には「光」の「和らか」さが覗いているのであり、巨大な「象」の「目」のような優しさが見

て取れるというのである。また、中將の「口」については、「今にも笑まんずる気はいの断えず口もとにさまよえる」と描かれていて、そこから、彼の内面にあるユーモアに満ちた温厚さが伝わってくるとされている。

ここまでくれば、片岡中將という人物における外観の冴えなさと同様の内面の優しさ、これはまさにクリのそれと通じ合っていることが分かるのではないかと。

クリの木の武骨な外見は、片岡中將の外貌の冴えなさに、そしてクリの毬の鋭い棘や硬い皮は、中將の軍人としての勇猛さと何物にも屈しない剛毅さに重なる。優美ではないが威風があり生命力あふれるクリの花は、中將という堂々とした人物の、精力に満ちた力強さと結びつく。また、クリの毬や鬼皮の下には甘美な果肉が隠されているが、中將のいかつい外観の下にも、彼の内面の優しさと温かさが秘められているのである。

蘆花が『不如帰』の中で、クリの木を、片岡中將の人となりを描くための背景として用いたのは、クリに見られる様々な特徴が、外面は武骨でありながら内面には優しさを秘めている中將という人物を表現するのに最も適していると考えていたからだろう。

蘆花にとって「栗」の木は、一般的には知られていないにしても初夏に「肩総」を思わせる壮麗な花を「満樹に」咲かせる点、外見は樹皮も葉も荒々しくて見栄えがよくなく、実も逆立つ棘に覆われているが、その棘ある毬の奥には至上の甘い実が秘められていて、最終的には人々に大きな喜びを贈ってくれる点で、独自の魅力を有する「愛す」べき樹木ということになるのである。

16) 三木謙吾「武蔵野に生ふる木(四) 雑木林」(『武蔵野』第7巻第3号、1924年、所収)、46頁。

17) 徳富蘆花、前掲『不如帰』、36頁。

18) 同上、37頁。

19) ハゼノキはもともと日本に自生していた木ではなく、木蠟を採るために、室町末期に中国から琉球、九州を経て日本各地に広がったとされている。ヤマハゼの方は、それ以前から日本の山野に自生していたので、万葉や平安の時代に「はじ」と呼ばれていたのはヤマハゼを指すことになる。伊東隆夫他、前掲『日本有用樹木誌』、174頁などを参照。

VI 雑木林の中の「榿」

武蔵野の雑木林を構成する主要樹木として蘆花が最後に名前を挙げたのが、「榿」である。

「榿」は、現在では「はぜ」と読むのが普通であるが、古くは「はぢ」・「はじ」と読まれてきた(今の読み方の「はぜ」は、「はじ」が転化されたものだとされている)。植物図鑑には、普通ハゼノキまたはその近縁であるヤマハゼの名で載っている。双方ともウルシ科の落葉喬木であり、葉は互生奇数羽状複葉でよく似ているが、ハゼノキの葉と芽が無毛であるのに対し、ヤマハゼには毛がある点で区別される。ハゼノキもヤマハゼも、人が触れたりなどすると、かぶれる場合があり、通常は人々から敬遠されている樹木である。黄緑色の小花を円錐状に多数つけるが、美しいと思う人はまずいないだろう。実も淡褐色で地味であるが、その実からは和蠟燭の原料となる木蠟が採れるので、その点では貴重な有用植物である¹⁹⁾。

ハゼノキ(またはヤマハゼ)は、春や夏の間はとくに人の眼を惹く樹ではないが、秋に入ると一転、その羽状複葉の小葉が鮮やかな朱色または深紅色に色づき、雑木林の中にあって、もっとも華やかで目立つ木に変身する。

それゆえ、古来より、ハゼノキの紅葉は、歌の世界で「榿紅葉」(はじめみじ)として、楓紅葉(かえでもみじ)と並んで、秋の季節の美を代表するものとして愛でられてきた。たとえば、西行も『山家集』で「山深み窓のつれづれ訪ふものは色づきそむる榿の立枝」²⁰⁾と詠んでいるし、『新古今和歌集』には、藤原親隆の「鶉鳴く交野に立てる榿紅葉散りぬばかりに秋風ぞ吹く」²¹⁾という歌が見える。

また、ハゼノキは、紅葉時の美しさから昔から庭園にも好んで植栽された。たとえば、『平家物語』巻六には、紅葉好きだった高倉天皇が内裏の小山に「はじ」や「かへで」を植えて、終日眺めて飽きなかったとある。

御在位のはじめつかた、御年十歳ばかりにもならせ給ひけん、あまりに紅葉をあいせさせ給ひて、北の陣に小山をつかせ、はじ、かへでのいろうつくしうもみぢたるを植ゑさせて、紅葉の山となづけて、終日に観覧あるになほあきだらせ給はず²²⁾。

近世に入っても、江戸城の本丸庭園などで、ハゼノキは、紅葉の美しさを愛でるために植え付けられていたという²³⁾。

江戸後期に刊行された小野蘭山『本草綱目啓蒙』には、「榿」について「秋月早く紅葉シ、甚美シ。ハゼモミジト云」²⁴⁾と書かれている。同じく江戸の後期に、屋代弘賢によって編纂された類書『古今要覧稿』では、「霜後鮮紅に染て甚美観なり餘木の紅葉よりも葉の表深紅にして裏は黄色にきは立てみゆるなり…中略…秋の末に至れば榿の葉は黄色になり其後赤みさして黄赤交りたる色に成…中略…後には紅になるなり是をはじめみぢといふ歌にもよめり」²⁵⁾と、美しく色づいていく過程までもが詳記されている。「榿」の紅葉は、前書では「甚美シ」、後書では「甚美観なり」と、その色づきの見事さが特筆されているのである。

明治期の武蔵野の雑木林にある「榿」に話を戻そう。上原敬二は、「武蔵野の樹木」の中で、ヤマハゼについて、「漆科の植物、複葉を生じ形の整った樹性で、秋の紅葉が…中略…美しい。各処の

20) 『西行全歌集』久保田淳・吉野朋美校注、岩波文庫、2013年、203頁。

21) 『新古今和歌集』峯村文人校注・訳、小学館、1995年、163頁。

22) 『平家物語①』市古貞次校注・訳、小学館、1994年、424-425頁。

23) 飛田範夫『江戸の庭園 将軍から庶民まで』京都大学学術出版会、2009年、44頁を参照。

24) 小野蘭山『本草綱目啓蒙3』平凡社、1991年、16頁。

25) 屋代弘賢編纂『古今要覧稿』第4巻「草木部上」、国書刊行会、1907年、427頁。

雑木林に混生してゐる。さう大木はない。…中略…点景木として秋の山野に見遁せない樹である」²⁶⁾と評している。秋を迎えて色づいたヤマハゼは、それが林のところどころにその紅一点の姿を現すだけで、俄然、雑木林の風景の秋色を引き立たせてくれる木なのである。また、上原は別の書で、ハゼノキについて「古来ハジモミジの名が文献に示され、秋の紅葉のなかでは第一に数えられていた」²⁷⁾とも述べている。カエデの紅葉より、ハゼノキのそれが勝っているという見立てである。いずれにせよ、ハゼノキ(ヤマハゼ)の秋の色づきは、カエデ類のそれと比べても勝るとも劣らない美しさを有していることができるのである。

秋の季節の到来とともに、ハゼノキは、それまで濃い緑一色だった雑木林の中に、鮮烈な紅色のアクセントを生み出す。ハゼノキの葉が赫々と色づけば、人の眼は否応なしにそこに向かってしまうのである。紅葉時に発現するその格別な美しさゆえに、蘆花は、武蔵野の雑木林を代表する樹木の五番目として「榿」を選び入れたのではないか。

雑木林の中にある樹木で蘆花が最初に名を挙げた「榿」と「櫟」は、春の季節に、その爽やかな新緑の「和らかな」²⁸⁾美しさを、次に挙げた「榛」は、冬の季節に、その「趣深」²⁹⁾くもけなげな風情を、そして「栗」は、初夏の季節に、その「肩総」³⁰⁾のような咲きっぷりの壮観さを、それぞれ、私たちに見せてくれる。そして、秋の季節には、「榿」が、その燃えるように鮮やかな紅葉を私たちに供してくれるのである。「榿」は、蘆花にとって、点景木ではあるが、武蔵野の雑木林の(秋の美)をもっとも鮮烈に表徴している樹木だった。

雑木林中の多種ある木から蘆花は五つの樹木名を挙げたのだが、蘆花が意図していたにせよ、あ

るいはそうでなかったにせよ、結果的に、四季ごとの雑木林の美をそれぞれ代表する樹木が選ばれるということになったのである。

VII 雑木林に見られるその他の樹木

蘆花は、武蔵野の雑木林にある代表的な樹木として「榿、櫟、榛、栗、榿」を挙げたが、そのほかの樹木も「猶多かる可し」としている。ここで述べられている「猶多かる可し」樹木とは、どのようなものなのだろうか。

武蔵野の雑木林の植生について比較的詳しく記述されている文献のうち、なるべく時代の古いものに拠って、それを探ってみることにしよう。

昭和10年に、当時東京市の公園課長だった井下清は、雑誌『武蔵野』に寄稿した「武蔵野の雑木林」という文章の中で、次のように述べている。

武蔵野の雑木林は如何なる樹種から構成されて居るか…中略…上木、即ち長年存続するものとしては赤松が最も普通である…中略…下木としては、榿、櫟、ソロ、赤楊類、榿、栗、榛を中堅として山桜、合欽木、エゴノキ、マユミ、ヤマボウシ、ガマズミ、ヌルデ、ゴンズイ、ネジキ、ヤブムラサキなどが混入してゐる。湿気の多い処にはコブシ、ミズキが生育してゐる³¹⁾。

すでにIVで引用した文と一部重なるが、織田一磨は、昭和19年に発表した単行本『武蔵野の記録』で、こう書いている。

樹木の種類は、クヌギ、コナラ、エゴ、ゴンズイ、ニガキ、モミジ、イヌシデ、ケヤキ、エノキ、ヤマハンノキ、コブシ、それにムラサキシキブ、ノイバラ、ハギ、モチ等が低く周囲に自生してゐる³²⁾。

26) 上原敬二「武蔵野の樹木」(田村剛・本田正次編『武蔵野』科学主義工業社、1941年、所収)、279-280頁。

27) 上原敬二『樹木ガイド・ブック』加島書店、1962年、229頁。

28) 徳富蘆花『自然と人生』「雑木林」(岩波文庫)、64頁。

29) 同上、「榛の木」、86頁。

30) 同上、「栗」、71頁。

31) 井下清「武蔵野の雑木林」(武蔵野会編『武蔵野』第22巻第7号、1935年、所収)、3頁。

市河三喜は、昭和31年刊の「武蔵野の自然」において、武蔵野の雑木林で見られる樹木について、ただ名前を列挙するだけでなく、それぞれの樹木に簡要なコメントを加えながら案内している。

雑木林へはいつてみよう。花が咲けばヤマザクラ、実のなる頃にはクリ、…中略… ところどころに見るネムノキ、亭々と聳ゆるアカマツ、…中略… ただ雑木林の中で一番多いのはクリの外にナラとクスギ、…中略… 花が咲いて目立つ木はコブシとエゴノキで、前者はモクレンの小さいような花を開き、後者は初夏の候真白な花がたくさんついてそれが地上に落ちたのを見て気がつくことが多い。ミズキは車輪状の枝ぶりに特徴があつて、この実を食べたヒヨドリやムクドリが集つてくる。やや珍しいが同じ頃白い四弁の花をつけ、ちよつと趣きのあるのが、「四照花」即ちヤマボウシである。…中略… 秋小さな紫の実をたくさん結ぶのがムラサキシキブで名ばかり御大層な雑木、赤く紅葉するのはニシキギとヌルデ、ハゼ、…後略…³²⁾

蘆花がそもそも樹木名を挙げておらず、また本稿が「小品『雑木林』に登場する樹木について」と題していることから、登場していないその他の「猶多かる可し」樹木のことにあまり詳しく論及する必要はないのかもしれない。が、檜山庫三が昭和28年に出した『武蔵野植物記』の中で、武蔵野の「台地林」について記述した際に、蘆花の小品「雑木林」の文章を引用し、それに詳しい解説を施して、この小品を私たちが理解するのに少なからず参考になると考えられるので、以下、少し長くなるが引用しておきたい。

台地林

「東京の西郊、多摩の流に到るまでの間には幾箇の丘あり谷あり、幾条の往還は此谷に下り此丘に上りうねうねとして行く。其処此処には角に割られたる多くの雑木林ありて残り」と蘆花の書いた林こそ今では大分減ってはいるが、まだまだそここにとり残された林叢が目にとまる。

武蔵野の樹林は、特に植林されたものでない限りは、落葉性調葉樹を主とした雑木林となっているが、またアカマツの林も少くない。武蔵野に風致を添えるこれらの雑木林は、農家に薪材と堆肥の原料を供給するかたわら農作の手を休める憩いの場所となってきたもので俗に「中山」などといわれている³⁴⁾。

檜山は続いて、「雑木林」中の「余はこの雑木林を愛す。木はナラ、クスギ、ハン、クリ、ハジなど猶多かるべし」という文を取り上げ、これについて次のように書いている。

ナラの類は雑木林の主木であつて、これを除いたら武蔵野の樹林の味は大半失われてしまふに違いない。樹種としては極めて平凡であるが、雑木林に不可欠の要素となっている。ここにいう雑木の中には、

コナラ　クスギ　クリ
イヌシデ　アカシデ　エゴノキ
シラカシ　アラカシ　ムクノキ
ケヤキ　ハンノキ　ヤマハンノキ

等が目立つ…後略…³⁵⁾

さらに、「なお多かるべき樹種」として、檜山はそのあと、数多くの樹木名を網羅的に挙げているが、そのなかの主要なものを、以下に記しておこう。

イヌガヤ、サワラ、ヒノキ、シイノキ、アカガシ、カシワ、エノキ、コウゾ、クワ、コブシ、ヤマコウバシ、クロモジ、ウ

32) 織田一磨『武蔵野の記録』洗林堂、1944年(復刻版：武蔵野郷土史刊行会、1982年、141頁)。

33) 市河三喜「武蔵野の自然」(同『私の博物誌』中央公論社、1956年、所収)、ただし、引用は、上林暁編『武蔵野 日本の風土記』宝文館、1958年、97-98頁から。

34) 檜山庫三『武蔵野植物記』内田老鶴圃、1953年、22-23頁。

35) 同上、23頁。

ツギ、ヤマザクラ、ネムノキ、ヌルデ、ミズキ、ムラサキシキブ、…後略…³⁶⁾

武蔵野の雑木林に生育していた樹木については、その他にも様々な人によってリストが作成されている³⁷⁾が、多くの者が共通して名を挙げている樹木といえば、ソロという呼び名もあるアカシデとイヌシデ、そしてコブシ、エゴノキ、ヤマボウシ、ミズキ、ネムノキ、ヤマザクラなどということになるだろう。

アカシデ、イヌシデなどのシデ類は、ナラ、クスギ、クリに次いで、武蔵野の雑木林でよく見かける落葉喬木であるが、やはり薪炭材となる広葉樹である。ただ、上原敬二によれば、シデの木は「繊細な枝條、軽い小さな葉、枝振りに軽妙さを感じるもの」で、「野生木だが、庭木に適する」³⁸⁾とされている。また、辻井達一は、アカシデについて「枝はわりと細く、優美な感じさえする。葉も…中略…全体として繊細な感じが強い。樹皮はグレーで、これもなかなか上品なものだ」³⁹⁾と評している。シデの木の容姿は「繊細」・「軽妙」・「優美」であるという点で、武骨そのもののナラやクスギ、クリとは一線を画すようである。おそらく、そのためなのだろうか、蘆花は結局、シデ(ソロ)を、ナラ、クスギ、クリらの仲間には入れていない⁴⁰⁾。

コブシからヤマザクラまでの花については、武蔵野の雑木林を熟知し、またそれに深く魅せられ

た人々が書き残している言葉を拝借して、それらの特徴を見てみることにしたい。

コブシの花については、織田一磨が、「木蓮に似た純白の花で、早春頃の武蔵野には、稀れにみる美しい品の良い花」⁴¹⁾と記している。

初夏に白い小さな花を下向きにたくさん咲かせるエゴノキは、足田輝一によれば、「緑のドームの中に、豪華なシャンデリアのようにつりさがった」⁴²⁾姿を見せるとされる。

晩春にその四枚の白い総苞(これが花びらのように見える)を十字型につけるヤマボウシは、同じく足田によると、「数十、数百の白いチョウの舞うように群れている」⁴³⁾さまを思わせるという。

足田は、ミズキの花については、「白い花の階段を、まるでなだれのように、展開している」⁴⁴⁾と描写している。

ネムノキは、上原敬二の言によると、「芭蕉が西施にたとへ…中略…夏を通じて淡紅色の斑らな花」⁴⁵⁾を咲かせ続ける。

ヤマザクラの花については、足田は、「臙脂がかった赤味をおびた若葉と同時に、うす紅の花びらをひろげる」が、「野生の美しさ」があり、早春の雑木林の中で、「灰褐色の雑木の枝々が交差するなかに、ちりばめられたうす紅の色には、^{ろう}臙脂^{つや}たけた艶さえ感じられる」⁴⁶⁾と述べている。

短い引用文を読んだだけでも、それぞれが花咲いたときの美しさが伝わってくるようだが、実際、そ

36) 同上、23-25頁(檜山は約90種類の樹木名を並べているので、ここに引用したのはその一部である。煩雑さを避けるため、この引用文では「…中略…」の表示を省いた)。

37) たとえば、三木謙吾、前掲「武蔵野に生ふる木(四) 雑木林」、43-47頁、本田正次『植物学のおもしろさ』朝日新聞社、1988年、213-215頁、犬井正『人と緑の文化誌』三芳町教育委員会、1993年、40-43頁、など。

38) 上原敬二、前掲「武蔵野の樹木」、271頁。

39) 辻井達一『日本の樹木』中央公論社、1995年、92頁。

40) 蘆花は後年、『みみずのたはこと』の「落穂の搔き寄せ」「春七日」の中で、「四月十七日。…中略…ソロなどの新芽は

…中略…花より美しい」と書いている(『みみずのたはこと』(下)、岩波文庫、1977年(改版)、27頁)。早春時、アカシデの若芽と若葉は赤みを帯び、眼を惹く。秋時の紅葉も美しいとされている。

41) 織田一磨、前掲書(復刻版)、145頁。

42) 足田輝一『雑木林の博物誌』新潮社、1977年、108頁。

43) 足田輝一『雑木林の四季』平凡社、1978年、125頁。

44) 足田輝一『雑木林の博物誌』、110頁。

45) 上原敬二、前掲「武蔵野の樹木」、276頁。

46) 足田輝一『雑木林の博物誌』、28頁。

これらの花は、樹木にもこのような華やかで可愛らしい花が咲くのかと思わせるほど、すぐに人の眼を惹き付けてしまうものである。

だが、蘆花は、そうした、一目見ただけで直ちに人を魅了するような花をつける樹木は、武蔵野の雑木林を代表する五つの樹木の仲間に加えなかった。それは意識して蘆花がおこなったことだろう。蘆花が名を挙げたのは、一見地味で武骨な木、普段は注目されることも称賛されることもない樹木、しかし、四季を通してじっくり観察していくと、その隠された豊かな魅力が見えてくるような樹木だった。Ⅳでも述べたが、目立たぬもの、控えめなもの、しかしその内奥に美しさを秘めたものにこそ、蘆花の愛情は注がれるのだった。武蔵野の雑木林の主要樹木を選ぶときにも、そうした姿勢は変わることがないのである。

—(3)に続く—

【付記：「肩総」のルビについて】

引用文中および本文中において、「肩総」に「エポオレット」と「エポレット」の2種類のルビを振っているが、これは、『自然と人生』と『不如帰』を引用する際に用いた岩波文庫版に付されているルビをそのまま振ったものである。『自然と人生』では、民友社発行の初版(1900年)、新潮社版全集(1929年)、岩波文庫(1958年改版)のいずれにおいても「^{エポオレット}肩総」となっており、一方、『不如帰』では、民友社初版(1900年)、新潮社版全集(1930年)、岩波文庫(1971年改版)のいずれにおいても「^{エポレット}肩総」となっているので、ルビの統一はおこなわなかったことを断っておきたい。

On the Trees Appearing in the Short Piece “Zouki-bayashi” (Copse) by Tokutomi Roka (2)

Takayoshi Kaneko

In the short piece “Zouki-bayashi” (Copse), Roka regarded the Japanese oak, the sawtooth oak, the alder, the chestnut and the wax tree as representing the copse in Musashino. In Part 2, we will examine Roka’s aesthetic consideration of the chestnut and the wax tree.

In his brief piece “Kuri” (Chestnut), he wrote that the chestnut is an unrefined harsh tree with a coarse bark, rough leaves and aggressive spiny burrs but that it hides very sweet nuts inside the burrs. Not many people know that chestnut flowers bloom in early summer. Roka, however, explained that these beautiful flowers consist of egg white color inflorescences that fully cover the tree and that the inflorescences can remind us of the epaulets of a navy officer. The chestnut tree indeed has a rough appearance; yet, the sweetness of its nuts and the abundance of its flowers made the tree adorable to Roka.

The leaves and flowers of the wax tree are not so beautiful, and the tree itself does not catch our attention in the forest. However, the vivid autumn color of its leaves is incredibly captivating, and it is this special charm that made Roka view the wax tree as one of the five most symbolic trees in the copse.

The forest offers a variety of trees far greater than Roka’s five symbolic types, including the Magnolia kobus, the Japanese snowbell (*Styrax japonica*) and the Japanese dogwood (*Cornus kousa*), all of which produce pretty flowers. Anyone can understand and admire their beauty. Nevertheless, Roka did not refer to them as significant trees in this copse. He always preferred plain and modest trees with hidden beauty. Roka loved rough inconspicuous trees that are not usually admired but reveal their strong hidden allure when closely observed through the four seasons. In choosing the five trees symbolizing the copse in Musashino, his sense of aesthetics consistently played an important role.

